

会議録
令和5年度 第1回総合教育会議

- 1 日 時 令和5年7月28日（金曜日）
午後2時30分～午後4時

- 2 場 所 中央図書館2階 視聴覚ホール

- 3 出席者 市長 星野 光弘
教育長 山口 武士
委員 宮 陽一
委員 深井 美千代
委員 横田 豊三郎
委員 深野 はるみ

- 4 署名委員 委員 宮 陽一
委員 深野 はるみ

- 5 説明職員 教育部長 磯谷 雅之
学校統括監 武田 圭介
学校教育課長 大竹 宏治
学校教育課副課長 西嶋 環

- 6 事務局職員 政策財務部長 水口 知詩
政策企画課長 荒田 和久
政策企画課副課長 甲佐 隆志

- 7 傍聴者 0人

- 8 議 事 小中一貫教育について

【星野市長】

皆様こんにちは。令和5年度第1回総合教育会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。委員の皆様方におかれましては、教育委員会会議に引き続いての会議となりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

先日、7月21日に「いじめのない学校づくり子ども会議」に参加をさせていただきました。毎年拝見させていただいておりますが、会議を中学生がうまくリードされていたと感じております。私は、鶴瀬小学校の会場での参加でございましたが、オンラインによる他の拠点を拝見しても、同様な風景を感じることができました。

また、それぞれの児童生徒が自分事として議論をし、そして会議の中でまとめ上げたものを持ち帰っていただき、それぞれの学校で、しっかりと広げていただくということが次の課題であると感じており、このことは校長先生をはじめ皆様方をお願いしたいと思っております。大変意義のある事業がしっかりと築けているということを感じたところでございます。

さて、本日の総合教育会議につきましては、「小中一貫教育について」を議題とさせていただきます。本市では、いわゆる「中1ギャップ」の解消に向けて、小・中学校のよりよい連携を図り、義務教育9年間を見通した系統性・継続性のある教育の実践を進めていく「小中一貫教育基本方針」を平成31年1月に定めたところでございます。令和2年度からは西中学校区と本郷中学校区をモデル校として、小中一貫教育支援員を配置し、中学校から小学校への乗り入れ事業の実施やカリキュラムの研究などを進めているところでございます。

一方でこの間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という大きな環境変化の中で、学校の施設、建物等の管理なども含め大きな課題も生じていると認識しております。

このような課題を市長部局と教育委員会が連携を図りながら、まずは子どもたちのためになる教育の方向性の議論を深め、そこに生じる予算措置や制度を含め、総合的に検討していかなければならないと考えております。

とりわけ、この小中一貫教育についてはロングスパンで考えていかなければならない課題であると認識しているところでございます。

学校施設につきましても、11の小学校、6つの中学校、そして特別支援学校がございましたが、本市においても今後到来する人口減少を踏まえると、いずれどこかのタイミングで学校施設の統廃合などの再編も視野に入れないといけなくなると感じているところでございます。そうした中で、小中一貫校教育に取り組むことは、学校施設の統廃合などの大きな課題解決策の一つにもつながるものだと捉えております。

まずは、子どもたちに小学校入学から中学校卒業まで、一貫した9年間の教育を行うことについて責任を持つということだと思っております。

後半に申し上げた学校施設の再編等の部分は、まだまだ先のことでございますので、本日は現在取り組んでいる小中一貫教育についての議論をさせていただきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

【荒田政策企画課長】

星野市長ありがとうございました。

それでは、以降の進行につきましては、星野市長にお願いさせていただきます。

星野市長、よろしく願いいたします。

【星野市長】

それでは、会議に移らせていただきます。議事に入る前に、本日の会議録署名委員を指名いたします。会議録署名委員には、宮委員と深野委員をご指名いたしますので、よろしく願いいたします。

本日の議事は、「小中一貫教育について」でございます。

冒頭のあいさつの中でも触れさせていただきましたが、小中一貫教育基本方針に基づくこれまでの取り組みや課題、今後の展望などにつきまして、ご説明をさせていただきます。

それでは、大竹学校教育課長、よろしく願いいたします。

【大竹学校教育課長】

(小中一貫教育について説明)

【星野市長】

ありがとうございました。現在、本市で行われている小中一貫教育の取り組み、また現実的な成果と課題、最後につきましても人材の確保など、現場の状況について、ご報告をいただきました。

平成31年に小中一貫教育基本方針を策定して取組を進めてまいりましたが、新型コロナウイルスの影響もあり思うように進められない時期もありました。これまで、モデル校として本郷中学校区及び西中学校区の4つの小学校を中心に、小中一貫教育支援員を配置して取り組んでまいりましたが、本年6月には新たな取組として勝瀬中学校区におきまして、情報交換会を開催し、ふじみ野小学校と勝瀬小学校の先生方が一堂に会して9年間の学びをつなぐためのアクションを起こしていただきました。

ご説明をいただいた中で、まず小中一貫教育についてご議論いただく前に、質問がございましたらお受けをしたいと思います。

その後、皆様からご意見を頂戴したいと思います。追加でご説明いただきたいようなことがありましたらお願いいたします。

【深野委員】

勝瀬中学校区の取り組みの中に、合同一斉下校と引き渡し訓練がありましたが、どのように行われているのでしょうか。

【大竹学校教育課長】

緊急事態が発生した時に対応できるよう、中学生が小学校に行き、中学生と小学生が自宅付近まで一緒に帰る取組を行っております。

【星野市長】

モデル校として西中学校や本郷中学校の取組をご紹介いただきましたが、他の中学校区においても、乗り入れ授業などは実施されているのでしょうか。

【大竹学校教育課長】

モデル校以外において、乗り入れ授業は実施できておりません。

ただし、加配がある学校、例えば勝瀬中学校の数学の先生が月に数回、鶴瀬小学校に行き、乗り入れ授業のような形で、子どもたちの指導をしている学校はあります。

【星野市長】

現在は、西中学校と本郷中学校をモデル校として位置付け、支援員を配置してモデル事業を行っているという理解でよいでしょうか。

【大竹学校教育課長】

今年度の現時点では、本郷中学校に英語の支援員を配置して行っております。

【武田学校統括監】

課長が説明したとおりですが、勝瀬中学校の先生が、小学校に来てくれています。乗り入れ授業というのは、中学校の先生が小学校に来て、算数の授業や国語の授業を行うことや、小学校の授業を参観して、もう少しこういうポイントを押さえると、中学校の学習につながっていくなどというような助言をしてもらうこともあります。

そうすることで、小学校と中学校がつながり、小学校の先生の指導力の向上や、もしくは小学校の丁寧な授業を見てもらうことで、中学校の先生が中学校1年生の1学期の時期に、こんな言葉を使うと、子どもが理解するのかもしれないと気付くこともできます。最初から中学校2年生や3年生を相手にするような言葉遣いではなく、小学校から入ってきたばかりの生徒には、ここからスタートすると良いというような実態を理解して帰ってもらう、こういうところがとても大切になります。

さらには、例えば勝瀬中学校の先生は、鶴瀬小学校だけではなく、ふじみ野小学校や勝瀬小学校にも行くことによって、それぞれの学校のレベルが分かることで、勝瀬小学校はもう少しここに力を入れてもらえると、入学当初に鶴瀬小学校、勝瀬小学校、ふじみ野小学校で、大体これぐらいのレベルで足並みを揃えて授業をすることができる、などというようなことも可能性としてはあります。現在は、十分に指導が行き届いているところまでは達しておりませんが、様々な可能性があると考えています。

ただし、乗り入れ授業をするにあたって、中学校の先生が小学校に行くと、中学校の先生が行っている授業に穴が開いてしまうので、支援員の配置が重要になってくるところでございます。

【星野市長】

ありがとうございました。他に何かご質問ありますか。

【宮委員】

小中一貫教育とは少し外れるかもしれませんが、私が校長を務めていた平成24、25年頃から、小中一貫教育というのはこういうものであるというものが発せられていて、小中連携は以前から言われていましたが、県の施策で、中学校の先生が小学校に行っていたJプランという制度があったと記憶しております。中学校の先生が1年あるいは3年間、小学校に行って専門の授業を行い、小学校で教えた子どもと一緒に中学校に戻るといった制度だったのですが、現在では行われていないのでしょうか。

【大竹学校教育課長】

現在も制度としてはありますが、富士見市内にその先生はおりません。

県内で何人いるかは把握しておりませんが、制度がありますので、おそらく取り組んでいる市町村があるのではないかと思います。

【山口教育長】

人事交流について補足いたします。宮委員から質問のありましたJプランという制度があり、本市でも実践した経緯がございます。富士見台中学校の国語の先生を鶴瀬小学校に異動させて、3年間、国語を中心に小学校の高学年に指導をして、卒業生と一緒に富士見台中学校に戻るといったものです。これも小中一貫教育の一つの形ではありますが、現在県で何人その対象の先生がいるかを把握しておりませんが、各市町村にそれぞれいるわけではなく、全県で数人いるかどうかというところで、人材確保等にも課題があるので、簡単にできることではありませんが当時も効果は見られました。

【星野市長】

人事交流の一環で、3年間行っていただく、市町の教育長の判断で、手挙げ方式のような形で実現できるということでしょうか。

【山口教育長】

制度としては、県教育委員会の人事のため、最終的には県教育委員会の判断になりますが、市町村として推薦をする形で、こういう人材がいるので小・中学校で交流をしたいということを市町から推薦することで実現は可能です。

【星野市長】

ありがとうございます。他にご質問ありますか。

それでは、委員の皆様からご質問を頂戴しましたので、続いてご意見を頂戴したいと思います。まず私から申し上げたいと思います。

本市におきましては、冒頭申し上げましたとおり平成31年に方針を立てて小中一貫教育をスタートさせていただきました。これも教育委員会の皆様のご努力を持って今日まで来ているわけでありますが、その効果または結果的に生まれる成果への期待というものは大きいものがあると思っています。

一方で、モデル校としてスタートをさせ、6つの中学校すべてで実施ができるかとなると、中学校の先生が乗り入れをされるにあたり、中学校の授業に穴が開いてしまうという課題もあると伺いました。したがって、目標は立てたものの、実施するには人材が不足している状況であるということを理解いたしました。

しかしながら、乗り入れ授業そのものだけではなく、勝瀬中学校の内海校長先生のように、小・中学校の先生方で集まろうというような声掛けをしていただいたのは、大変大きな取り組みだったと私は思っております。その中で、勝瀬中学校区の研究組織を立ち上げていただき、年に数回、情報交換会を含めて取り組みをしてみようということでもありますので、事例としては良いものを起こしていただけたのかなと思っております。併せて、限られた人材の中で、試行錯誤していくことが必要だと思ったとともに、乗り入れ授業などをしっかりと行うためにはもう一工夫、または予算措置も含めた手当が必要だということも感じたところであります。

この説明を受けての私の考えは今のとおりであります。なお、引き続きご努力をいただき、議論を深めながら、市長としては財政的な支援も含めて検討をしていく必要があることだと理解をいたしました。

最後に勝瀬中学校の取り組みがどのような広がりを持てるものなのかということをご質問したいと思います。

【大竹学校教育課長】

勝瀬中学校の取組は、6月に立ち上げ、夏休み中にも研究部ごとに部会を開く予定のため、この後どのような成果が出てくるのか私達も楽しみにしているところです。内海校長先生にはこの取り組みを他の中学校区でも可能な範囲で情報提供等していただき、進めていただきたいというお話はしているところです。

一方で、各中学校区によって今までやっている取り組みもございますので、それも活かしながら修正を加えたりするところが出てくるかと思っておりますが、校長会等を通してお話はしていただきたいなと思っております。

【星野市長】

ありがとうございます。それでは委員の皆様にも順番にお願いさせていただいてよろしいでしょうか。

【宮委員】

小中一貫教育の前に、小中連携における様々な取組がありましたが、小中連携があり、その先に小中一貫教育があって、先ほど星野市長からお話いただいたように、10年後とかになるかもしれませんが、もしかすると小中一貫校というのが出てくるというような形だと思います。

小学校から中学校へ進学する接続がうまくいかなかったことによって、いわゆる中1ギャップである、学習面や生活面に課題が出てきているものと思います。

今までは中学校から小学校へ行くということはありませんでしたが、逆に小学校の先生が中学校でどのように教えているのかを見に行く、授業参観でも何でもよいのですが、そういうものがなかったと思います。双方の先生が授業を見ることにより、中学校の先生はこんなことも小学校で教えていなかったのかとか、あるいは、小学校の先生がこれは中学校行ったら教えてくれるからいいよとか、色々な発見があり、一緒に連携しながらやっていかないと難しいものがあると思います。実際に小中一貫といっても、カリキュラム的に学校の生活自体が小学校と中学校では、時間的なものとか時数的なものが違うので、難しいと思いますが、それはそれぞれの学校で工夫することで、できないものではないというふうに私は思います。

先ほどの合同下校という形であれば、小学校中学校で当然、中学校は部活もありますから下校時間が違います。それを一緒にするという事は、例えば中学生が一旦、小学生と一緒に帰って、それからまた中学校に来るとか、あるいはその日は短縮で、小学校と一緒にしようとか、そういうような色々な工夫をすることによって、妥協点は見つけられるので、ぜひ小学校と中学校の先生のやりとりというのを、時間を何とか工夫して、できるようにしてもらえればなと思います。

もう一つ以前の「いじめのない学校づくり子ども会議」で、私も鶴瀬小学校で見させてもらいましたが、富士見台中と鶴瀬小学校とつるせ台小学校のグループで見えたのですけれども、富士見台中の女の子が司会をしていて、リーダーシップをとってすごくうまくやっていて、その中でぼろっと言ったのが、私達中学生より小学生の方がたくさん考えを持っていて、色々な考えが出てくるってというような言葉を発していました。子ども同士が直接接することで、小学生が中学生を怖いとか、そういうのはあるのかもわかりませんが、実際に接することで、子どもたちもその経験で成長ができるのではないかと、それも小中一貫教育の一つではないかと私は思います。

【深井委員】

小中一貫教育の取り組みしてはすごく良いことだと思いますし、また、長いスパンで考えていかないと絶対に解決できないことだと思います。

宮先生もおっしゃっていましたが、小・中学校の先生たちの横のつながりが強くなれば、きっとこの小中一貫教育も少しずつ前に進んでいくのではないかと思いますし、あと、児童生徒たちに交流をさせて中学校はこんなに良いところなんだよ、こういうことができるんだよって、何か中学校招待会みたいな感じで、小学校6年生を呼んで

一緒に過ごす時間を作るとか、そういうのを少しずつやっていくことによって、中1ギャップも軽減していくのではないかと思いますし。本当に工夫が必要で、今後の課題はたくさんあるとは思いますが、ぜひ有意義な小・中学校の生活を送れるように、私達大人ができることをやってあげられたら良いなと思いました。

私には今、中1の娘がいるのですが、小学校から中学校に上がったからの娘は変わりました。良い方にも悪い方にも変わっていきませんが、様々な経験をとおして子どもたちが成長いくので、私達はそれを見守っていく立場であると考えています。先輩や、先生たちがいる中で、子どもはすごく葛藤しながら頑張っていると思いますし、小学校の先生たちは、よしよしってやってくれたのに、中学生になると、急に突き放されてしまうので、その中で頑張っている大人ならなければならないけど、まだ子どもでいたいという葛藤にすごく苛まれていると思います。そのため、周りの人たちが大丈夫だよって言ってあげられる環境になったら、少しでもギャップがなくなっていくのではないかと思います。

【横田委員】

令和3年に教育委員を拝命された時に、小中一貫教育について非常に興味を持っていましたが、本日の話を伺うと、あまり進んでいなく、少しスピードが遅いのではないかという考えを持っています。先生方の働き改革という一つの大きな喫緊の課題があると同時に、小中一貫教育をどう進めるかというのは同じ市内の子ども、児童生徒ですから、抜本的な改革と市長または教育委員会わかりませんが、大胆な英断が必要になってくる時期が近々にあるのではないかと考えています。

なぜこのような言い方をさせていただくかということ、私は私立学校で30数年勤務しておりまして、私立学校の変遷の真ただ中にいました。例えば1990年代後半には、中学校の卒業生が減るという危機感から、高校の生徒募集で非常に苦しい思いをしてきました。その中でインパクトの無い学校名を変えようじゃないかということがあり、続いて、女子校だったのを男女共学にするという様々な取り組みを喧々諤々とやってきました。その後、2000年代初めに中学校を設立しました。これも非常に喧々諤々、学内でも数年間揉めに揉めて、財政面の問題とか様々ありましたが、中学校から子どもを受け入れないと高校生の受け入れがなかなか難しいため、中学校を設立することになりました。その際には、中学校ではどのような教育をするべきか、というようなことの話し合いを再三してきました。そこで、例えば今のお話を聞いていると、どうしても教員の問題がメインに出てきていますが、子どもたち、小学生で言うと児童、それから保護者の姿が見えていないと感じます。例えば、先ほど深井委員が言われたように、やっぱり児童が中学校の授業を見ると、または中学校の授業を先取りして受けると、また保護者が中学校の授業を、授業参観で公開授業をすると、こういう自分の子どもが中学校行ったときにこういうような授業を教わるのだというようにわかれば、ある程度安心して中学校にいけると思います。ただし、私の教員の立場で考えると、小学6年生をいかに引き取るか。そのためには、保護者を

抱き込まなきゃいけない、そのためには、魅力ある学校、魅力ある授業、それから問題は、中高一貫のその先のことも含めて、親を説得するということです。うちの学校に来れば、途中で予備校に行かなくても、そのままストレートで大学行けますよというような売り言葉でどんどんセールストークをしていきました。

保護者目線で考えると、今いる小学校の保護者の方を、中学校の授業がどういうものなのかということを見てもらうようなことも必要なんじゃないかと思っています。また、子どもたちの将来のことを考えたときに、手厚く対応してくれるということを、私学は大きく打ち出していますが、公立学校では小学校と中学校が別れていることによる中一ギャップを起こさないように、保護者や児童を中学校ではこういう授業をしているよ、魅力があるよということを、どんどん伝えていくことが必要であると考えます。例えば小学校の先生が中学校の授業に見学に引率した場合は、そこで授業を行ったと考えれば良いのではないかと思っております。

この問題は、どこかで大きな起爆剤を用意しないと進めるのは難しい問題ではないかというふうに私は思っています。

【深野委員】

私が知っていたのは私立の中高一貫ってというのは知っていましたが、私が卒業した高校はその後、中高一貫校になったのですが、その方が人気は上がったという話も聞いたので保護者の方は、子どももそうなのかな、長く同じところで学びたいと思っている子が多いのかなと感じました。

最近、私の子どもの学校区は勝瀬中学校とふじみ野小学校ですが、ふじみ野小学校はうちの娘が通っていた頃は6年生の3分の1ぐらいは、勝瀬中学校には行かなかったのかなと思っているのですが、今はやっぱり勝瀬中学校はどういう学校かというのもよく知るようになり、学校新聞が掲示されているのを見ると、小学生が行って、中学生の合唱を聞いたり、走り方を教わったり、そういったこともあって交流が深く進んでいるというふうに新聞で見ましたので、そういうように知っている学校だと行きやすくなるのかなと思うので、できればそういう交流はやっぱり続けてほしいなと思いました。

やはり乗り入れ授業は難しく、大変そうだなと、お話を聞いて思いましたけれども、少しずつでも、先生たちの交流があると指導の仕方にも変化があったりして、良いのではないかと思います。

【山口教育長】

平成30年度に目標を持ち、理想を掲げた小中一貫教育基本方針を策定してから5年が経過いたしました。当初、私が描いていた5年後の姿に追いつけていないのは、忸怩たる思いがあります。

新型コロナウイルスによって学校間の交流が制限されたことや、働き方改革により教員がかけられる時間が大きく制限されてしまいました。また、教員不足が急速に進

み、小学校は小学校、中学校は中学校で、自分の学校の中でも教員が不足しているため、教務主任が担任を持ったり、教頭先生が授業を多く持ったりしている状況で、自分の学校内でのやりくりをするのに精一杯となり、小・中学校で交流するところまで手が回ってない、この三つが大きな要因になっていることは自分でも分かっておりますが、これにより、進むスピードが鈍ってしまったことは大変残念に思っています。

これから先につきましては、新型コロナウイルスの影響は落ち着いてきておりますが、働き方改革による時間の制限と教員不足による人材の制限については、ここは今、打つ手がなかなか無いというのが現状です。小中一貫教育の推進にあたり、少しネガティブなところから始まりましたが、このような中においても、子どもたちの交流は着実に進み、宮委員が紹介していただいたように、子ども会議を見ても、子どもたちの成長を感じています。

それから、教員の交流による指導力の向上を期待していましたが、ここは少し目標よりは遅れてはおりますが、順次進んでいると思います。一つ例を挙げると、小学校の先生はとても丁寧にやってくれるけど、中学校の先生は、やや言葉を悪く言えば乱暴でしたが、教員間の交流により大きく変わったのが、中学校でも掲示物を丁寧に扱うようになってきたことです。学校の姿が変わってきていますし、それは小学校に行き行って学んできたものだなと思いますし、中学校の教員も子どもへの対応はだいぶ丁寧になってきたところからも、小・中学校のギャップは埋まりつつあると思います。

ただし、まだまだもう一歩も二歩も前進させたいところなので、それぞれの学校がカリキュラムの研究も進めていますし、それを実践に移していくこと、それから、交流をさらに充実させていくこと、人材不足や時間の不足については工夫しながら、何とか進めていきたいと思っております。

【武田学校統括監】

横田委員からご提案のあった体験については、いくつかの中学校区で小学校が中学校に体験授業に行くことをやっている学校がございます。また、深井委員からあったギャップを無くすことについては、小学校から中学校に上がる時にギャップがあるから急に大人になれるという面もあります。そのギャップが大きすぎないよう、ちょうど良いギャップにしていくことが大切です。そのために、小・中学校の先生が、お互いに交流をして互いのことを知るといったことがとても大切になると思います。それが、勝瀬中学校区が今やろうとしていることであり、先生同士の交流目的を持ってやっていますが、会って話をするのが本当に大きく、意味があるものではないかと思っております。

最後に、人事交流の話もありましたが、現在、中学校の先生がふじみ野小学校に1名おり、小学校の先生が富士見台中学校に1名おります。勝瀬中学校にも、小学校の経験と中学校の経験を持っている先生がおります。そして、管理職では小・中学校両方を経験している校長先生、教頭先生も増えてきていますので、これから新型コロナ

ウイルスの影響により1度止まりはしましたが、今後進んでいくと感じているところでございます。

【星野市長】

委員の皆様から貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

横田先生から保護者の存在もある意味、味方につけることも重要であると、登場人物の視点として欠けていたということを感じたところでもあります。

市長部局におきましてもこの小中一貫教育における支援を、教育委員会とともに検討してまいりたいと考えております。これまで、総合教育会議において体力、小中一貫教育、いじめ、いのちの授業などを取り上げてまいりました。小中一貫教育の議題についても経過報告をいただく機会を頂戴したいと思います。

それでは、本日予定しておりました議事をこれで終了させていただきたいと思えます。ありがとうございました。

事務局から連絡等がありましたらお願いいたします。

【荒田政策企画課長】

事務局から1点ご報告がございます。本日の議事録署名委員に指名されております、宮委員、深野委員におかれましては、議事録がまとまり次第、ご署名をよろしくお願いいたします。

【星野市長】

それでは、以上をもちまして、令和5年度第1回総合教育会議を閉会とさせていただきます。本日はありがとうございました。